

令和5年1月21日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム 令和5年度 第1回

今年は分かれ道

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

只今、今井副理事長から中斎塾フォーラムの運営についてお話がありました。中斎塾フォーラムは15年を経過しました。15年の成果をそろそろ見せる年になったのだと感じました。四つの分野（フォーラム運営、理事会・幹事会の組織運営、教科書作成、研究成果の発表）について検討をしていくということで、今年はそういうことを考えるのに、ちょうどよい年回りでもあろうと存じます。

と申しますのは、季刊誌「知足」や四季だよりも書かせていただきましたが、今年は日本がどんどん繁栄をしていくか、または衰退していくか、分かれ道の年であると思っています。分かれ道とは、国だけではなく各組織、自治体であれ会社であれ家庭であれ、または個人でもそうです。いろいろな意味で分かれ道を意識する年回りであると私は考えています。

今年は正月三が日、私は動き回っていました。元旦は太田のショッピングモールに行きました。周辺の道路は凄い渋滞でした。2日は花園のアウトレットモールへ行きました。こちらも押すな押すなの大盛況でした。感じたのは、全体的に活気がある。支配人さん・マネージャーさんと話をしましたが、とても前向きで、今年は頑張って繁栄するぞ！という感じが伝わってきました。

次に群馬県庁に行きました。よく言えば穏やかという印象でした。その後は、別のショッピングモールに行きましたが、こちらは閑古鳥が鳴いていました。中の設備機器を見ても、古いと感じました。分かれ道で、坂を下りていく側だなという印象を持ちました。

3日は都内に出て、薬品会社のグループ本社を見て来ました。地下鉄出口の階段を上ると目の前に入り口があるのですが、驚いたのは、入ってすぐ目の前に壁一面のアート（芸術作品）がありました。文明を感じさせるもので、解説書のようなものがあれば見たいと伝えたところパンフレットを戴きました。やはりそういうものには経営哲学や理想が込められていると感じました。

その後、本郷にある国立大学のキャンパスに行きました。活気が溢れているという感じはしませんでした。尤も冬休みですから閑散としていて当たり前ですが、大学の敷地内に誰でも入れるようになっていて、何か悪戯をしようと思えばいくらでも仕掛けることができる環境でした。

今年は分かれ道ということで見ると、わずか3日間でしたが、シムックスに現役復帰しお客様の所を回ってみて感じた事は、伸びていく会社、落ちていく会社、横ばいの会社と三つ分かれました。ということは、これからはお客様を選別せねばならない、その判断基準を作らなければいけないとつくづく感じました。翻って、当然お客様も警備会社を選ぶわけですから、お客様に選ばれる会社になるよう努力をしなければならぬと感じました。

恒例の質問

では、恒例の質問を先に致します。昨年一年間を振り返ってお考え下さい。

○ 昨年一年、良い日が結構あったと思う方

会場参加の方も Zoom の方も、全員手が上がったようです。素晴らしいですね。

○ 昨年一年、嘘をつくことがなかったし、嘘もつかれなかった方

手の上がない方に申し上げますが、嘘をつかれた事をずっと覚えていてもあまり良いことはありませんから、年が改まったことですし、さっさと忘れてしまうことです。何度も申し上げますが、質問は全部主観で考えて下さい。客観的に何日あったとか何回あったと覚えていると、どうしても手を挙げて証明したくなります。それはもう綺麗さっぱり忘れる。主観で手を挙げる方が良い、そういう質問です。

○ 昨年は有難うとよく言ったし、よく言われたと思う方

○ 昨年は身体の手入れをよくやったと思う方

○ 昨年一年間、自分磨きをよくやったと思う方

自分磨きは、身体を手入れすると同時に、頭の中身もよく磨く。両方行ってはじめて自分磨きになると考えています。

○ 昨晚眠る時に、明日以降のことを過去形で考えて眠った方

会場で手を挙げられたのは山崎先生お一人ですので、差し支えなければお話し戴きたいと存じます。

(山崎幹事) フォーラムの前に朝稽古で棒術の指導をさせて貰っていますので、それが非常に上手に出来たなということ過去形で考えるように致しました。具体的には色々やるべきことを自分なりに整理して、それが滞りなく上手くいったと思って眠りました。

「礼」について考える

では、論語に参ります。今日のテーマは「礼」を取り上げました。論語の中に「礼」という言葉はかなりあるのですが、6つ抜き出しました。孔子の時代は国が乱れて、礼式も乱れている状況です。礼について孔子の考え方を見ていきます。

① 有子曰く、礼の用は、和を尊しと為す。先王の道、斯れを美と為す。小大之に由れば、行われざる所有り。和を知りて和すれども、礼を以て之を節せざれば、亦行わるべからざるなり。（学而第一・12）

有子は孔子の弟子です。

有子が言うには、礼を実践するには調和が良い。昔の王はこれを素晴らしいとした。小さい事も大きな事も皆、礼によらないものはない。しかし、調和が大切だからといって何でも調和でいくと、お互いに譲り合って段々生ぬるくなる。きちんとした規範（ルール）を使って節制をしなければ、また乱れてしまうものだ。

ここで言う「礼」とはいったい何か、孔子に言わせれば政治制度であり、風俗習慣のルール、又は官僚の官位制度、それから一般にあっては行儀作法（葬儀であるとか祭礼の儀式の作法）・・・そういったものをひっくるめて「礼」と言っています。

つまり「礼」とは、人の履み行う儀則と考えればよろしいでしょう。したがって、礼儀作法という段々ガチガチに固まってくる、鑄型にはめられてくるものだと受け止めても結構です。

少し脱線をします。吉田松陰は伊藤博文を「周旋の才あり」と評しました。周旋とは、AさんとBさんの間に立って程良く仲を取り持つことです。伊藤博文はこれに腹を立てて「私は学問を学んだのであって、取り持ちのようなことだけ上手になったのではない。私は吉田松陰の弟子ではない」と言っていましたが、後年、吉田松陰は神様のような扱いになったので、私は松陰先生の弟子だと世間にも堂々と言うようになりました。いずれにしても「周旋の才」とは、この場合の「和」ですから、これを伊藤博文は使いこなしたのだなと感じます。

この論語は、自分自身が規範を身に付けたかどうか、そして調和の実践方法も身に付けたかどうかを考えなさい、と有子が言ったと捉えればよいでしょう。

②子曰く、之を道くに政を以てし、之を斉うるに刑を以てすれば、民免れて恥ず

ること無し。

孔子が言うには、民を導くには法律を使うが良い。(後でどんでん返しがありますから、そのつもりでお聞きください) 民を従わせるには刑罰をもってすれば良い。そうすれば、民は法律を犯さなければ良いと思って、何をしても恥だと思わなくなる。

・・・国民が恥を恥と思わなくするには、法律で規制し刑罰で従わせれば良いのだ、と反語で言っています。

現代に置き換えて考えます。今の政治家は率先垂範していませんから、国民を導く資格はないと私は考えています。導くとは、普通の学者は「指導」と解説することが多いけれども、はっと悟らせるという理解が良いでしょう。はっと悟らせて、こう動くべきだと自分で自覚することです。今の政治家や官僚、教育者には導くだけの資格はないと私は思っています。

ですからここは、今の政治家、官僚、教育者は法律によって規制をし、刑罰をもって従わせようとする。こんな馬鹿な話はない！ とお読みになれば良いでしょう。

続いて、

これを道くに徳を以てし、之を斉うるに礼を以てすれば、恥ずること有りて且つ格る。

(為政第二・3)

国民を導くには人徳(思いやり)が必要である。国民を統制するのに礼をもってすれば、国民は自分の心が咎めるような行為をしたら恥ずかしいと思う。それが調和の原則から生まれた礼式であれば、自然と尊重するようになるのではないか。

③林放 礼の本を問う。子曰く、大なるかな問うこと。礼は其の奢らんよりは寧ろ儉なれ。喪は其の易まらんよりは寧ろ戚めと。(八佾第三・4)

林放は魯の国の人ですが、孔子の弟子ではありません。

林放が礼の根本を孔子に聞きました。

孔子は礼儀作法と捉えて答えています。

「それは大きな質問だ。儀式を行う際は、贅沢にするよりは儉約する方が良い。葬儀は、坦々と要領よく進むよりは、哀悼の情がこもるようにしなさい。」

何度かお話していますが、私はご逝去の連絡が来た時、その方と最後の別れの挨拶をしたいと思った時、仮に遠くの地であっても葬儀に参列しようと思うし、実行してきました。形だけ哀悼の意を表すというのは、あまり好きではありません。孔子の言われたものと似通っている部分があると思いました。葬儀の時、心から「さようなら…有難うございました」と言える、そういう間柄のお付き合いが出来ると良いなと感じます。

④子貢 告朔の餼羊を去らんと欲す。子曰く、賜や、爾は其の羊を愛む。我は其の礼を愛む。(八佾第三・17)

子貢は目から鼻に抜けるような才人です。

毎年12月に君主は自分の配下の諸侯に来年の暦を配ります。諸侯は毎月朔日に自分の廟(祖先のみたまや)に羊を生贄として捧げ、暦に従って領民に農事のスケジュールを告げる、それが告朔という儀式です。

子貢が告朔の儀式をやめようとした。

それを聞いて孔子が子貢に言いました。「お前は、生贄の羊を惜んでいるのだろう。私はこの礼式(告朔の儀式)がなくなる事を悲しいと思うのだ。」

魯の国では文公という君主の頃から告朔の儀式をしませんでした。羊を供えることは続いていました。子貢は魯の国の官僚になっていたため、経費削減で羊を供えることを止めようとしたわけですね。それを聞いて孔子が、伝統文化の重要性を考えなさいと叱った場面です。

今の家庭に置き換えれば、先祖代々でなくても、親からずっと伝わっている家の伝統行事のようなものがあれば、それは守っていくのが良いと思います。

私の思い出を申しますと、父親は80歳で亡くなりましたが、父親の事を思うと一つだけ鮮明に思い出すことがあります。我が家は正月元旦には雑煮を食べるのですが、子供の頃私は、「雑煮は嫌だ。餅は海苔を巻いて食べたい」と父親に盾を突き、家を飛び出したことを覚えています。普段親子で話をしないのだから、こういう時には皆で雑煮を食べながら話をしようではないかという父親の思いを、当時は考えもしませんでした。今は自分も親ですから、そういう伝統文化を子供に伝えようという親の気持ちが分かるようになりました。その年にならないと分からないものとは、こういうものではないかと思い出しました。

⑤子曰く、上に居て寛ならず、礼を為して敬せず、喪に臨んで哀しまずんば、吾何を以て之を觀んや。(八佾第三・26)

これは官僚の事を考えればよいですね。または会社でも結構です。

上のポストにいる人が下の者に対して寛大でない。何か儀式をする時に、敬虔な気持ちがない。葬儀の時、哀悼の情がこもっていない。私は、こういう心に敬のない人達をどういう心持ちでみればよいのか。

・・・礼儀作法には敬がなくてはならない。情けない事だと孔子が嘆いています。

お葬式で沢山の方が参列を致しますが、時々、どれだけの人が本当に悲しんで尊敬の気持ちをもってお別れを言いに来たのかなと感じます。

⑥子曰く、命を知らざれば、以て君子為ること無きなり。礼を知らざれば、以て立つこと無きなり。言を知らざれば、以て人を知ること無きなり。(堯曰第二十・3)

命は天命です。君子は素晴らしい人物と取ればよろしいでしょう。

孔子が言うには、自分が一生の間で何をすべきかを自覚出来なければ、素晴らしい人物にはなれない。礼儀作法を知らなければ自立できないし、役職についてもきちんとした仕事ができない。人の話をよく聞かなければ、人物を知ることが出来ない。

「言を知らざれば、以て人を知ること無きなり」の部分で、「見・観・察」を付け加えておきます。論語で言えば「視・観・察」、人を見る時の判断基準です。

人の名前と顔を覚えていて、どこに住んでいるかも分かる。その人を知っていると軽く答えられるのが「視」です。その人がどういう人物かよく見定めて、自分なりに納得をしている。お付き合いして3ヶ月から半年ぐらいその人の言行を見続けて、自分なりに納得すれば、その人がどういう人物か人さまに言える。これが「観」です。本人も分からない心の奥深いところまで洞察出来るのが「察」です。

人の言を聞いて、その人物の気持ち、由って立つ所まで理解しているかどうかを考えるとよいでしょう。

時事評論 — 令和5年を考える —

繁栄か没落、岐路の年

令和5年は「癸卯」（きぼう・みずのとう）です。「癸」は五官（五つの官職）を全て司る職制、日本でいえば内閣総理大臣がそれに当たります。「卯」は雑草が生い茂るという意味合いです。

国を率いるトップ、内閣総理大臣が素晴らしい人物であれば、その国はどんどん繁栄していく。総理大臣が駄目な人間であれば、どんどん衰退していく。それがはっきり分かる、分かれ道の年であると「癸卯」を捉えます。

コロナは死亡しないことが肝心

コロナについては、死亡しないことが肝心であると思っています。今日の新聞を見ると、コロナの位置づけを4月下旬に5類相当にするとあります。致死率が下がったからという理由です。致死率とは感染した人のうち、死亡する人のパーセンテージです。致死率がどんどん低下しているから、もうそろそろ5類にしてもよいと考えて、国民のためにそうしました…という岸田さんの発表です。嘘をつくなと思いました。なぜ、国にお金がないから5類にせざるを得ないとはっきり言わないのでしょうか。

今日の新聞では3192万人が感染したという発表ですが、私は致死率がいくらという見方をしないで、実際に何人死んだのかを調べています。そうしますと、初年度2020年は3492名が亡くなりました。翌年2021年は14,901人（累計18,393人）が亡くなりました。3年目の昨年2022年は39,141人（累計57,534人）が亡くなっています。今年に入ってから半月ちょっとで、7,582名が亡くなったと発表されています。

死亡者数を見れば、初年度が3500人弱。2年目が1万5000人弱。3年目の昨年が3万9000人。そういう流れで行けば、今年も10万人が死亡する可能性があるわけです。毎年毎年死亡者は増え続けているのに、致死率がどんどん減ったから5類にするというのはおかしい話だと思っています。

したがって、コロナは死亡しないことが肝心です。致死率が下がったらよかろうと思っ

今年は騙されないように

私は以前、新聞は事実が載っているかどうかしっかり見た方がよいと言っておりました。途中で、新聞は半分事実、半分は違っているから気をつけて下さいという言い方をしました。最近までは、新聞はヒントが書いてあるから、そのヒントを見て自分で考えましようと言いました。今年の新聞に対する私の考え方は、新聞はフェイクニュースで埋まっている。騙されるな！と申し上げます。

例えば、中国の三戦です。三戦については、昨年何度もお話しています。中国の人民解放軍が2003年に、「これからは三戦を大いに活用する任務が与えられた」と公表しました。つまり、三戦で敵国の戦意を喪失させる。武力を用いるのはその後だということです。三戦とは、

世論戦・・・その国の世論を誘導させ、とても中国には敵わないと思わせる。

心理戦・・・とても中国に敵うわけがないと尻尾をまくまで心理を陥れる。

法律戦・・・中国が是とする法律を作る。例えば、中国はこういう法律を作りました。

我が国の人民はどこに住んでいても、我が国の法律に拘束される。つまり、日本に住んでいる中国人は、中国が日本を攻めると宣言をしたなら、直に武器を持って立ち上がって日本を攻撃しなければならない。そうしない場合は我が国の法律によって罰する・・・という意味がこもっていると私は受け止めています。

ハイブリッド戦～グレーゾーンの事態

三戦を踏まえて、ロシアがウクライナを攻めました。これはハイブリッド戦と言われます。しかし今年ハイブリッド戦から更に進化して、宇宙からの攻撃が加わりました。現在はどのような状況かという、平時と有事が曖昧になっている「グレーゾーン」の事態です。自衛隊の中でも「グレーゾーン」という言葉が、もう当たり前になっています。

2021年の防衛白書では、サイバー戦に備えて自衛隊にサイバー部隊を作り、540人の隊員が所属しています。サイバー戦争とは、グレーゾーンの中での戦争の形態です。ちなみに、北朝鮮には6800人のサイバー戦争に備えた隊員がいます。一番多いのが中国で、17万5000人がサイバー戦争に関係しており、その中で専門の攻撃部隊は3万人います。ですから日本は、まるでサイバー戦争に備えていないということです。攻めれば簡単に降参させられると見なされているわけです。

今、私が怖いと思っているのは対馬です。朝鮮半島のすぐ傍ですから。その次に鹿児島県の南にある奄美大島です。ここには自衛隊が350人駐屯しています。奄美大島の下に沖縄本島がありますが、ここは2200人。宮古島は380名。与那国島はもう台湾の隣ですが、160名です。これは数年前の数字なので、今はもっと増えていると思います。

真偽は分かりませんが、石垣島のあるホテルに中国人の所有するマンションがあり、海上保安庁の船がどれぐらい石垣港に出入りしているかをカウントしているという話もあります。ですからもう、完全に日本はグレーゾーンに入っています。特に意識するのは尖閣諸島とか、与那国島、石垣島、奄美大島、沖縄です。そこら辺を中国・北朝鮮・韓国・ロシアは「日本」と捉えていますから、完全にグレーゾーン、サイバー戦争の真っ只中にあ

と思っています。

サイバー戦争はその国を騙すことが肝心で、そのために一番よいのがメディアです。メディアを使ってその国の国民を騙すわけです。ですから今、我々は騙されないようにしなければいけません。新聞等では「認知戦」という言い方をします。騙し騙される戦争という意味です。そういう状況下に今年に入っていると申し上げて、新年の最初の講話と致します。

質疑応答

(質問：篠原会員) 「礼」とはどのようなものか、漠然として分からないので、具体的にどのようなことを教えていただきたい。

「礼」というものは、概念がすごく広いのです。柔道では「礼に始まり礼に終わる」と教えています。動作態度は礼に則ってきちっと決めると良いということで、柔道には型がありますから、それにどっぷりつかって動いていると、立ち居振る舞いが実に見事だというわけです。茶道であれば、振る舞いがきちんと礼にかなっているとか、武術であれば、挙措動作が模範だと言われることもあるでしょう。

個人でいえば、立ち居振る舞いがきちんとしている、物の考え方もしっかりしている。それには、敬虔な仕草を「礼」と捉えます。

一家の大黒柱であれば、子供たちに物の考え方を教えますね。「おはようございます」「いただきます」「行って来ます」「ただいま」と挨拶をする、食事の時の箸の持ち方から、靴はきちんと向きを変えて置く等々、躰ということで様々なことを教えます。世の中に出ても恥ずかしくない人に育ててもらいたい、優しく思いやりのある人になってもらいたい、世の中の役に立つような人になって貰いたい・・・という思いを込めながら子供を育てると思います。

それは大黒柱としてすべきことをきちんとやっているわけで、「礼」の考え方に基づく捉えます。つまり「礼」とは、人として履み行うべき道、人間として為すべき道をきちんと為すということです。

大黒柱として、子供に人として大事なものを、これを踏み外したら人間ではないというルール(規則・規範)を教える。会社、自治体、組織として、その中で守らなければならない規則(これは法律と繋がって来ますが)、法律に基づいている規則は守らなければいけません。つまり、人と人との間で守るべき道をきちんと守りなさい、その守り方を教えることが「礼」です。

一言で「礼」と言いますが、「礼式」と言うことが普通です。そうすると、礼の本質は何なのか、それから礼の本質を実際に具体化していくための手法はどういうものがあるかを分けて考える必要があります。

更に、何を対象として礼を考えるか。個人、家庭、所属している団体や組織、国家・・・礼はどこを対象として考えるかによって捉え方が違います。一番根っこは個人です。礼というものを考え出すとどんどん対象の範囲が広がりますが、最終的には自分の心の中一つに全部収まってきます。

ですから「礼」を一言に言うと、曰く言い難しということになりますね。会社で考えれば、「会社で決められたルール、それは守らねばいけない」・・・そこら辺から始めるものでしょう。同時に、常に相手を尊敬する気持ちが大事だと私は思います。

(質問：田島会員) 論語の為政第四に「七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず」とあります。「矩を踰えず」・・・社会的な秩序を守るためにそれに従う、ということが礼であると私は解釈しています。

田島さんはよく学んでおられますね。「矩」は先程申し上げた「履み行ふべき道」です。規則を乗り越えている「儀則」、人間としてせねばならぬ道と捉えればよいでしょう。人々が踏み固めた結果、誰もが通る天下の往来、天下の大道になっていくという考え方で、「履」という字を使っています。「礼」をずっと詰めていくと、自分自身に自然と身についたもので、好きなように自分勝手なことやっているように見えても、人間として履み行ふべき道は踏み外さないようになっている。人間としてやらねばならないものが身につくとお考え戴いて結構です。人間、そこまでいけば大したものです。